

## 舞台を観に行こう

ハンフリーー 恵子

京都で過ごした学生時代、私は様々な舞台を観た。あちこちで開催される演目を厳選し、限られた予算内でチケットを買ってはいそいそと出かけて行った。大学内にある生協では一部のチケットも販売しており、割と簡単に手に入れることができた。そこで、例えば大阪にオペラを観に行ったら、モーツァルトが好きだったので「魔笛」や「ドン・ジョバンニ」を観て感動した。「ドン・ジョバンニ」で舞台上置かれたテールに山と盛られた食べ物、突然動いてそこから女性が飛び出した時には、文字どおり私も飛び上がった。毎年冬には京都南座の「顔見世」に行った。学生が買えるチケットは、B席ぐらい。会場の一番後ろの壁に張り付いたような席で、急斜面に設えられたずいぶん高みにある席だ。そこから舞台を見下ろすと、あまりの高低差に転がり落ちるのではないかと思うほどだった。またある日、友達一人が能を習うと言い出した。本格的に師匠の元に通い、なんと観光客向けではあるが舞台に立つようにもなった。その友達の舞台も観に行った。顔向きで入れてもらった会場では、一番後ろの端の席。友達の顔を判別するのも難しいほど舞台は遠かった。

それでも舞台を観るのは楽しかった。舞台の醍醐味は、なんと言ってもその光と音と色。煌々と照らされる舞台に艶やかに映える色とりどりの衣装に身を包んだ役者たちが豪華な音楽に合わせて動き回る様は、まさに幻想の世界の光景だった。

特に私の記憶に残るのは、初めてのミュージカル、劇団四季の「オペラ座の怪人」だ。学生にS席は高嶺の花なので、A席がせいぜい頑張って手に入れることのできる席だった。壁際に張り付いた席あったが、ずいぶん舞台近くだったので、舞台上の俳優の表情もよく見えた。彼らの衣装の眩さに目をくらませ、天井に吊るされた巨大なシャンデリアに圧倒され、奏でられる音楽とその歌に酔いしれた。終演後もしばらくこの余韻は続き、その翌日はCDを買いに行った。劇団四季の「オペラ座の怪人」は確かに棚にあったが、その横に輸入盤の「オペラ座の怪人」もあった。学生の予算で買えるのは、輸入盤の方だった。それでも音楽を聞くと、舞台の映像が目に浮かんでくる。しかし輸入盤では英語なので一緒に歌えなかった。これも学生生活にはよくあること。限りある予算の中で、精一杯楽しめばいいのだ。

(はんふりー けいこ)

## 音楽の扉が開く時

大岩昌子

「身体の中を音楽が流れる」本誌第一号の座談会の中で、私はこんな発言をした。音楽と共にいるという気持ちだが、思わずこのような表現として口をついてきたのだと思う。

私が協奏曲や交響曲などの大掛かりな曲を聴くようになったのは、高校の音楽室である。シューベルト、ブラームス、メンデルスゾーン、チャイコフスキー、プロコフィエフ、そしてラヴェルなど、西欧音楽の大作曲家たちと、ここで出会った。出会いを導いてくれたのは、学校のオーケストラの指導者でヴァイオリニスト。初めて聴く壮大な曲想に私は夢中になった。こうした音楽体験で、私は、それまでピアノに限定されてきた自分の世界が大きく開かれた気がした。

音楽室で聞いた数多くの曲目の中で、最も印象に残っているのが、シューマン後期の作品、交響曲第三番だ。この作曲家の書いた四つの交響曲は、日本でもあまり人気がないせいなのか、残念ながらコンサートで聴く機会はお目にかかる機会がさほど多くない。私の身近でシューマンを一番好きな作曲家だと言ったのは、これまでにたった一人である。

第三番は珍しく五楽章から構成され、全体がライン川を象徴すると言われる。私が最も好きなのは第四楽章。大聖堂をモチーフとして思わせる流麗な宗教音楽にも聴こえる。祝典的な第五楽章への序章だ。シューマンを語る時、その悲劇性がよく引き合いに出されるが、この曲には、なにかしら、日常的な生活を希求するシューマンを感じる。その意味で、荘厳かつ重厚な響きを奏でながらも、どこかとてもロマンチック感興をそそられる。今から数年前ウィーンを訪ねてライン川畔に佇んだ時も、その感覚は変わらなかった。

私の音楽の扉を開いてくれたその人は、その後三十代の若さで、あっけなくこの世を去った。私は今でも時々その人の声と対話しているような気分になる。音楽をどう聴いたらいいか、音楽とどう生きればいいのか。見つけられない答えを探し求める旅人のようだ。いや、いつかきつと答えに辿り着ける時がくると信じなければ、響きのある声で怒られそうな気がする。

(おおいわ しょうこ)

## 小澤健二 in 武道館

伊藤達也

高校の同級生であった小澤健二君は、いつの頃からか小沢健二と書かれ、また本人も書くことに抵抗がなくなつたようだが、かつては頑に「澤」の字にこだわっていた。これは彼の家族への誇りからで、当時叔父の指揮者がボストンにおり、父親がドイツ文学者で筑波大学の副学長であるという事も含めて、川崎の丘陵地帯の公立高校の中で、彼のまわりだけ世界が違って見えた。

もっと勉強を教えて欲しいと生徒から苦情が出るほど行事の多い高校だったから、彼が文化祭や新入生歓迎会などでギターを演奏するのを何度も聴いた。ある年の文化祭では、有頂天による『心の旅』のカバーを、無塗装のストラトキャスターを演奏しながら歌っていた。彼は楽譜のない曲を耳だけで、どの指がどの弦をどの位置で押さえているかまで完璧にコピーしていたらしい。演奏会場は柔道や剣道の実習に使われる武道館という建物で、ポスターには「in 武道館」と誇らしげに書かれていた。当時天才ギター少年としてデビューしたばかりの鈴木賢司の曲を演奏したのは、体育館の中だったと記憶する。曲の途中でギターを頭上にあげ、指板を見ずにソロを弾き、観客が拍手をしたのをよく覚えていてる。

その後、私がフランスに留学することになった時、彼にも送別会の招待状を送ったが、自宅に電話がかかってきて、ソロデビューしたばかりで予定が立たない、今度出すCDはパリでもFNACとかで買えるかも知れないね、と言われた。最初のソロアルバムが出る直前だった。

ここ数年は毎夏、彼の叔父である小澤征爾氏の指揮を松本で聞いている。征爾氏が振ると音（とりわけ神の乗り物のようなサイトウ・キネンの弦）が塊となって客席を貫く。小澤家の遺伝系は、満州時代に小林秀雄を宿泊させていたという歯科医の祖父にまで遡るといふ。

最後にオザケン以前の小澤健二君を知る私は断言したい。彼は本来、愛歌団のような泥臭いアメリカ音楽が好きでブルースマンである。彼が演奏するギターをもう一度堪能できる場を真摯に希望する。

(いとう たつや)

## 笛吹き少年だった頃

諫早勇一

中学三年生のとき、変わった音楽の先生が学校に赴任してきた。「リコーダー」(別名「ブロックフレイト」という楽器を強制的に買わせて、音楽の授業はもっぱらそればかりやるという。厳しそうで近寄りたがたい雰囲気だったので、「スベリオパイプ」も経験していない自分にはとても付いていけそうにないと、最初は腰が引けていた。

ところが、友人からあの先生はリコーダーでは日本の第一人者らしいと聞いてから、突然興味が沸いてきた。フルートといえば、横笛ではなく縦笛だったというバロック音楽の話や、当時はバッハをしのぐほどの存在だったというテレマンの話聞くうちに、自分もバッハが吹けるくらい頑張ってみようかと急に色気が出てきた。「師匠」と呼ぶ、当時からアルトリコーダーを自在に操る友人(彼は後に、実技にリコーダーを選んで東京芸大の楽理科に合格したという伝説の存在だ)に弟子入り?して、授業時間以外にも笛を吹く日は始まり、リコーダーの名曲とされるバッハの『ブランデンブルク協奏曲 第四番』は遙かな遠い夢としても、バッハの『管弦楽組曲 第二番』くらいならと、渋谷の山野楽器に楽譜を買いに出かけた日もあった。

その先生は一年だけで、もつと音楽を専門にする学校に移ってしまったが、最後に思いがけず指名を受けて『管弦楽組曲 第二番』の「パディネリ」をつつかえつつかえ吹いたことは今でも覚えている。六年一貫教育で、高校入試もない環境がそんな自由を可能にさせたのかもしれない。ただ笛吹きに熱中したのはその一年だけで(後になって記念に一本一万円を超えるようなアルトとソプラノのリコーダーを一本ずつ買ったが)、高校に進んでからは、今度はなぜか男声合唱団に入り、そちらの方は大学に入った後もつづけることになった。

(いさはや ゆういち)

## 指揮棒の記憶

野谷文昭

緊張しているが落ち着いている。皆の視線が指揮棒に集まる。さあ振り下ろせ。突如フォルテが響く。会場はユネスコ村の屋外ステージだった。毎週日曜日に、川崎市の実家から電車で渋谷に出て乗り換え、池の上で下りる。坂を下ると練習場があった。小学校四年生のとき、地元のパイオリン教室に通っていた。ある日、新聞社が後援するジュニアオーケストラを紹介された。音の森の中での演奏はソロの練習の何倍も楽しかった。「白鳥の湖」から「未完成交響曲」「ジュピター」まで、全楽章ではなかったけれどシンフォニーを体験できたなんて、今思えば実に幸せだった。これだけは母に感謝だ。習い出したのは母で、次に妹が、それを見て僕もというわけでパイオリンに触れるようになったからだ。

夏休みに指揮法講座があり、そのために本物の指揮棒を買ってもらった。メトロノームを使い、単純なものから複雑なものまで、さまざまな拍子で棒を振られ、左拳も使うフォルテと手を開いて柔らかく動かすピアノの違いが上手だと褒められた。「みんな、見てごらん、強弱の表現がとてもうまいだろう？」思わず顔が火照った。忘れられない褒め言葉だ。

野外ステージでのコンサートはその成果を披露する舞台でもあった。曲は「ロシアン・ベザント・ダンス」。ただし先生が編曲していて、原曲も今ユーチューブで聞けるものとは違うようだ。わずか十六小節の曲だから完全に覚えている。きっかけがあれば頭の中で今もすぐ鳴り出す。

さあラストだ。両手を大きくゆつくり振り動かし、最後に指揮棒を小刻みに震わせて終わる。なんだか旅してきたみたいだった。そのときの横顔を写した写真が残っている。頭は坊ちゃん刈り、黒い半ズボンに白いタキシード。それに黒い蝶ネクタイ。今でもコンサートに行くこととつい手が動いてしまうことがあるのは、多分このささやかな指揮者体験の名残にちがいない。

(のや ふみあき)

## 音でよみがえる幸せの瞬間

ヴァミュールン 服部美香

今は亡き祖母が泣いているのを三回見たことがある。そのうち一回は祖母の小学校の先生が亡くなったという知らせを受けた時であった。もう三十年以上前の話で、祖母は当時七十代だったと記憶している。その先生の年齢的にも亡くなっても不思議ではないのであったが、祖母はリビングで大泣きをしていった。子供のころから私が家でピアノの練習をしていると、祖母は時々私に話しかけ、大好きだった平田先生の話をした。何度も聞き結末もわかっている話ではあったが、毎回、初めて話すかのように、平田先生がいかに素晴らしい先生だったかと言い、平田先生に教えてもらったオルガンの曲を一曲弾いて部屋を後にした。九十歳を過ぎて祖母が亡くなった時、会ったこともない平田先生のことをふと考え、感謝の気持ちが出た。今でも、自分はここまで人の心に響く仕事ができているだろうかと思うことがある。

音は昔の記憶を呼び起こすことがある。母も時々ピアノの練習中に昔話をした。母は小学校時代の演奏会で弾いた曲をまだ憶えていると、アイネクライネナハトムジークを弾いた。当然、祖母にも母にも私が生まれる前から人生があったわけで、彼女らの少女時代の話をピアノを介して聞くことができた。アメリカにいる義父はこれぞ紳士という人であるのだが、「即興でピアノで何でも弾いてくれた」と自分の母親について目を細めて語るときには、少年の眼の光を宿しているように見える。

四歳からピアノを習い始めたものの、私にはプロになるような情熱も才覚もあるわけでもなく、ちよつとした絶望感を抱えながらまったりと細々と練習をしてきた。若いころは情緒的なメロディーであるはずのものすべてがマーチのようになってしまい、ピアノの先生にため息をつかれたものもあったが、様々な感情を味わってきた今、あの頃よりは少しは想いのせる演奏ができるようになってきたかと思うかもある。そして、当たり前のように過ごした今日聴いた音も人生的一幕を懐かしく心の中で再現するきっかけになるのかもしれない。

(ぐあみゆーれん はっとり みか)

## 銀座の歌姫

阿部彰彦

数寄屋橋の有楽町マリオンのところに日劇があった頃、都心から離れた立川の高校生だった私は、今も付き合っている続く級友と二人で銀座に出掛けた。目指すは日劇大ホール階上の小劇場「ミュージックホール」である。父から「都内で一番高級なレビュをやる所だ。踊り子も歌手も大物だよ」と聞かされていたから、高校生達は親には内緒で、補導も恐れず、千円札を何枚か握りしめて都心に向かったのである。五二一教室程の薄暗い場内には、容姿よりは歌で勝負の同世代の小柄な歌手が出演していた。距離三メートルで見た踊りにも大量の生唾がでたが、彼女の歌には参った。相手役は、テレビでよく見た浅草オペラの大御所、晩年の田谷力三だから、父の言葉は本当だった。その後、彼女はテレビでも見かけるようになり、十七年には紅白に出場した。二世を風靡した小川ローザの「オー、モウレツ」は彼女の声である。

旧日劇のすぐそばの首都高の高架下「インズ2」には、現在も営業するジャズライブの老舗「銀座スウィング」がある。新入社員の頃、初めてこの店に入った時は、大人になったようで嬉しかった。彼女はここの常連だったから、何回かライブを楽しんだ。この店はボトルを入れると料金や予約で便宜がつく。金融機関の営業マンだった四十代の私は、気の張らない客の接待にこの店を使った。自分のボトルで接待費を節約し、接待で入れたボトルのお余りは私がいだく、という仕組みで、ささやかな業務上横領と正当な役得との綱渡りを楽しんだ。店の出入り口の所に会計があり、ライブが終わると客は行列して支払いを待つ。演奏者たちは、顔見知りのファンに挨拶しながら、行列する客の脇をすり抜けるようにして引き上げてゆく。私はここで彼女と握手した。

私より二歳年上のしばたはつみは、歌手としての女盛りの五七歳で亡くなった。

(あべ あきひこ)

## ゼミ生とともに世界の旅へ

小林洋哉

毎年、ゼミ生とともに歌による世界の旅を楽しんでいる。シャンソン、ラテン、ハワイアン、ポップス。特に、サンバのリズム・ブラジリアントロピカルなリズムを得意とする名古屋市中区葵のマンボランド・アカンタレでの宇野稚枝子さん（心をつなぐボーカリスト）のステージは秀逸。宇野さんによる英語・フランス語・イタリア語・スペイン語・ポルトガル語等の歌を聴いていると日本にいながらにして世界を旅している気分になることができる。さらには宇野さんによる英会話タジャレクイズも。

伴奏は、脳溢血半身不随から不死鳥のごとく復活されたピアノニスト桑原京子さん、元東京キューバンボーイズのパーカショニストのVITO氏。宇野さんは、いのちの尊さや生きる喜びをメロディーに乗せて伝えてくれる。以下、オリジナル曲の歌詞等から引用。つまづくといけないからって

出かけなかつたら 何もできない つまづいたっていいじゃん きつと つまづかなかつたときより いっそう多くのこと 学んでる」「大地は神様 根は先祖 幹は両親 素敵な花や実が実るのは 根っこが大 事 根っこを大切に」「不思議だよね こうして生かされてるってこと いのちの不思議」「早世した母が残してくれたもの それは私」……。

ちなみに、宇野さんの一人娘のユキさんは、インドでグループ企業経営をしているインド人と結婚しベンガルルにてホテル経営をされており、本年もゼミ生の日君が二か月間インターンシップでお世話になった。その間、現地の三井物産等の日系企業五十社以上を訪問し貴重な経験を積み遅く帰ってきた。

(こばやし ひろや)



## ハードディスクナイトな線上の青き悔恨

蕎麦谷 茂

まさに金を切り裂くような異音がして加工機が止まった。班長が飛んできてバイトと金槌で崩れて奥深く詰まったワーク（加工対象物）を取り出す。

「眠かったんか？ 氣イつけんと」班長の額に汗が光っている。

すみません——眠かったのは確かだが……。ワークを加工機にびったり挿入できなかったのはわかっていた。それぐらいは加工機が稼働している最中に調整される。タカをくくっていた。……ほんとうに、そう思っていたのだろうか？ うまく挿入されていないと知りながら、それにも拘わらず加工機のスタートボタンを押したのでは……。

「すみません」もう一度謝った。

「あと四十五分じゃ。がんばらまい」

かすかな朝陽が班長の柔らかな口元を照らしていた。

大量生産は一製品当たりの固定費が薄まることにより、コストが低くなり、消費者は安い製品を享受できる。大量生産は分業と規格化と同期化による。作業者は配置された持ち場の標準作業を守りタクト時間内に作業を終えることを強要される。決められた時間で決められた動作——八時間で四八〇個の部品をつくるとなると一分間に一個、すなわち一日四八〇回同じ動作を繰り返さなければならぬ。「仕事は本来、自分のイメージの表現という芸術性と交換により自分の作品の価値を高めるといふ社会性の二面性を持っていたが、分業により単純な労働になった」とはアレントの言葉であるが、機械的な動作の繰り返しで自分が工場の装置の一部になったように感じていた。

その時、機械の作動音に混じって誰か——ジョンが叫ぶように歌っているのが聞こえた。「犬のように働き、流水のように眠る」まさに今の自分だ。「When I'm home, everything seems to be right」自分はいいたいなにしているんだ。フレースが繰り返されると不意にも大量の涙が頬を伝った。「大きな会社じゃが同じ働く仲間やけん、すれ違ったら挨拶しようまい」

一ヶ月の工場実習を終えた時の班長の言葉だった。その後、会うこともなく時だけが過ぎ去った。あの時、ワークがちゃんと入ってないのをわかっていたながらスタートボタン押したのは、ラインを止めたかった。繰り返しの作業から逃れたかったからではないのか？ 自分のことだけ考えて……性根腐つとりました！ そういつて詫びたい。（そばたに しげる）

## 盲目のアポリジニ歌手と白人ロックバンド

濱嶋 聡

エリザベス女王、オバマ前大統領の前でも歌を披露し、ステイービー・ワンダー、ローリング・ストーンズ、ビョーク、エルトン・ジョン等からも絶賛されていた、盲目のアポリジニ・シンガー、ジェフリー・グルムル・ユスピング（Dr. Geoffrey Gurrunal Yunpingu）が、二〇一七年、七月二五日に、王立ターウイン病院で亡くなったという悲報が、アデレードの友人から入った。アポリジニ保留地、アーネムランド北東のエルコ島出身のユスピングは、シドニー・オリニックの閉会式で演奏したアポリジニ・バンド、ヨス・インデイ（Yohu Yindi）の元メンバーでもあり、ヨルング（Yolung）語による彼の歌詞は理解できなくても、その余情に満ちた澄み切った声に世界中の人が魅せられた。二〇一五年には初来日を果たし、日本の聴衆にもその「奇跡の声」を披露した。長年患ってきた腎臓病による享年四六というあまりにも早すぎるオーストラリアの至宝の喪失であった。また、同じ閉会式では、人気白人ロックバンド、ミッドナイト・オイルが、強烈なサウンドに乗せて先住民問題を世界にアピールした。大ヒットした彼らの代表曲「Beats Are Burning」は、「奪い取った土地は、アポリジニに返せ」といった内容で、バンドのボーカリスト、ピーター・ギャレットは、身長約二メートル、スキンヘッドという容姿で、ステージ上では独特のダンスで歌いまくる。彼は、オーストラリア国立大学人文学部とニューサウスウェールズ大学法学部の二大学を卒業しており、バンド活動を辞めたのち、政治家となり、労働党内閣時に環境相に就任したが、世界に名の知れた反捕鯨主義者でもある。また、労働党内閣時の国家元首は、ケビン・ラッド氏であるが、彼は、かつて政府、教会、警察によって強制的に家族から引き離され、強制収容所、孤児院、白人家庭（里子として）などに送り込まれ、徹底的に同化を強いられたために、今でもアテンティエイの喪失に苦しむ白人と先住民の「混血」の先住民に初めて公式に謝罪した。

（はましま やとー）

## Brenda Wootton

Philip Rush

Brenda Wootton: the “Cornish Nightingale”. An imposing figure, with a voice so powerful that it could make the room shake, or so pure, sweet and gentle that it seemed impossible for such a delicate sound to come from such a generously proportioned body. She could belt out a jazz standard, a rousing folk song, or the most ethereal of ballads with equal facility. She sang in Cornish as well as in English, French and Breton.

One of her songs was in French: “Ma Chere Cornouailles” (My Dear Cornwall), a poignant lament from an exiled Cornishman far from home and longing to see his native fields again. I heard it at a live performance she made at a local folk club. I was soon to take a group of my students to Brittany, and this song seemed to be a great choice to teach the students and to perform while we were there. However, there was no professionally recorded version available. Brenda had a concert near my hometown: what could I lose by asking? I arrived at her dressing room early, gathered my courage, and knocked on the door. She was graceful enough to invite me in. I explained who I was, and why I was there. I had brought my tape recorder, and was going to ask her permission to record that one song at the concert if she was planning to sing it. She wasn't. Then, in an act of generosity that quite overwhelmed



me, she offered to sing it to me then and there. I fiddled with the buttons, and my heart raced as the sweet sounds of her singing filled that tiny room. The song ended: it was time

for her concert. I played back the tape: disaster! In my haste I had forgotten to release the pause button. It was time for her to go. She looked at me, smiled, and sang it all the way through again. What an amazing lady.

We learned the song, took it to France, and spread a little bit of Cornwall abroad. I will never forget her incredible act of kindness nor her patience. Brenda died in 1994; sadly missed, but never forgotten.

(ラッシュ フィリップ)

## BWV 639、または崇高

亀山郁夫

どれほど齢を重ねようと、心のふるえは、起こる。そのふるえは、つねに、現在というかけがえない刻印を帯びて、過去のどんな記憶にもまましてなまなまし。他方、記憶の奥に散らばるシーンは、たとえいくつ数えあげても、たばこの吸い殻のような味気なさを伴う。ただ、これが失われながらもとても生きてはいけな、と思える感覚の記憶だけは残っていて、ことによると、それを「崇高」と呼ぶのかもしれない。

ここ数日、バッハ「われ、汝と呼ばわる、主イエス・キリストよ（ブゾーニ編曲）」（BWV 639）の旋律が頭から離れない。名もない渡り鳥のように、どこから来て、なぜここに住み着いたのか、理由もわからずに、戸惑いすら覚えている。わかっているのは、演奏しているのが、マレイ・ペライアであること。それに、この旋律との出会いの記憶もはっきりしている。今から約四十年前、当時、話題になっていたアンドレイ・タルコフスキーの映画「惑星ソラリス」を通して出会った。映画の冒頭シーンが、電子音楽による儼かな旋律で始まっていたのだ。

惑星ソラリスを探索する宇宙船内で異変が生じ、調査のために心理学者クリスが送り込まれてくる。到着したクリスは、科学者のほかにはいるはずのない船内に奇妙な「人影」を見かけて愕然とするが、やがて同じ事態が彼の身にも起こりはじめる。ソラリスを囲む磁場には、人間の無意識に埋もれた一部の記憶を物質化する力があるらしく、眠りから覚めたクリスの前に突如、かつて自殺した妻ハリイが肉体をまもって蘇る。

バッハの音楽は、フィナーレ近く、ブリュエゲル「雪中の狩人」の掛かるラウンジのシーンで再び使用される。クリスとハリイは無重力状態のなかでつかの間、至福に似た安らぎのときを過ごす、まもなく音楽は暴力的に断ち切られて、液体酸素を口にして自殺したハリイのなまなましい死体が大写真になる。なんとという残酷なモンタージュだろうか。

バッハの音楽は、その深い息遣いのなかで、自己犠牲の苦しみを慰め、諦めと神への恭順を説く。アウラでもノスタルジーでもなく、ただ切ないほどの思いのこもる祈りと「崇高」への憧れ。この「崇高」への祈りが失われるとき、芸術は死ぬと、タルコフスキーは真剣に考えていたが、悲しいかな、彼が予言し、恐れつづけた芸術の死は、遅からず訪れたのだった。

(かめやまいくお)